

# Fr.M. クリナーの一書簡

丸 山 三 友

## M. Riegers Klingerbuch

18世紀70年代後半から80年代前半のドイツ文学史を、新しいそして活発な創作活動で飾った少壮気鋭の天才達、彼等の生の軌跡を探り、活動の結実を考究の対象とする時、ゲーテやシラーを除いて、その殆どの場合資料不足という極めて困難な現実と直面しなければならない。尤もそれも、あのシュトゥルム・ウント・ドラング運動の先達となり、またその掉尾を飾り、さらにそれを克服し脱却して、ドイツ古典主義の高峰への偉大な発展を遂げた、ゲーテとシラーの生涯と作品に就ては、既にあらゆる角度から様々に究明された実に豊富な成果が出版され、いとも容易に入手し得る現状との比較に於てのことではあるが。熱狂的な嵐が去って、或いは転向し、或いは不幸な病のために挫折したヴァーグナーやマーラー・ミュラー、そしてレンツを思えば、文学史上に占める比重の差からして、彼等に関する研究の進展や充実の度合、文献の多寡の差異もあるいは当然の帰結と云えるのかも知れない。

それでは、レンツと並んでシュトゥルム・ウント・ドラングの劇作家として強烈な活力に満ち溢れ、またその精神の最も純粋な具現者であり、さらに1780年のロシア移住後も約30年、弛みない意欲を以て創作活動を継続したFriedrich Maximilian Klinger (1752—1831) の場合は如何であろうか。

先ずその作品集を挙げてみれば、クリンガー自身の編集による Fr. M. Klingers Theater. 4 Bde. (1786—88), 同じく Neues Theater. 2 Bde. (1790), 及び12巻からなる Gesammelte Werke. (1809—16) があり、次いでこれを底本に同じく12巻の F. M. Klingers sämtliche Werke. (1842) が Cotta から、また今世紀に入って、H. Berendt と K. Wolff の労作、Friedrich Maximilian Klingers dramatische Jugendwerke. 3 Bde. (1912—13) が貴重である。第2次大戦後は E. Loewenthal 他による Sturm und Drang. Dramatische Schriften. 2 Bde. (2. Aufl. 1963) の中に6篇のクリンガー劇、東独からは H. J. Geerdts の選集 Klingers Werke in zwei Bänden. (3. Aufl. 1970) のみ、とまことに乏しい状態であった。またさきのコッタ版にしても、発刊の時期からも察せられるように、完全な全集とは程遠い前近代的な作品集であると云わねばならない。ところが幸いにして、或いはここに到って漸くにしてと云うべきか、Max Niemeyer の企画が実現して、S. L. Gilman 他を編纂責任者とする Friedrich Maximilian Klinger. Werke. Historisch-kritische Gesamtausgabe が、この70年代終りから刊行の運びなり、既にその4巻が出版されている。標題通りのクリンガー全集の決定版として、その少しも早い完成が望まれる。

またクリンガー論、作品論は単刊で、或いは学術誌掲載の論文の形式で、前世紀およそ70年代あたりから、活発に数多く発表されて現在に及んでいる。古くは E. Schmidt の Lenz und Klinger (1878) から、例えば最近の H. Segeberg の F. M. Klingers Romandichtung (1974) など、示唆に富んで価値あるものが少なくない。またクリンガーの総体的な記述では、さきの dramatische Jugendwerke 巻頭の Berendt の解説、さらに O. Smoljan の Fr. M. Klinger. Leben und Werke (1962), Chr. Hering の Fr. M. Klinger. Der Weltmann als Dichter. (1966) など、いずれも研究者を裨益するすぐれた業績であろう。この Smoljan

と Hering の両書も価値ある Klingerbuch として今日定着したかにみえる。だがここでは、特にいまひとつの Klingerbuch に就て述べなければならない。それは 1880 年ダルムシュタットで発行され、書名は Klinger in der Sturm- und Drangperiode. Dargestellt von M. Rieger. さらに Mit vielen Briefen と添えられた、伝記と作品解釈に書簡を加えたクリンガー評伝である。Berendt も Dem Andenken Max Riegers と誌して自身の労作をこのリーガーに捧げており、また Smoljan, Hering のいずれもがこのリーガーに準拠し、さらにさきに挙げた最新の Gesamtausgabe 各巻の編集者もリーガーから例証するなど、この評伝はいまなお、生き生きと強い説得力をもってクリンガーの生の軌跡や作品成立の背景を語っており、この 1 世紀のクリンガー研究者にとっては不可欠の源泉、いや敢えて云うならば、一種規範の書とも云うべき意義を有しているのである。

1828 年ダルムシュタットに医家の息子として生まれた Max (imilian) Rieger は、大学では言語学を専攻し、ギーセンやバーゼルで講師としてドイツ言語学を講じ、のちヘッセン州の教会関係に役職を得るなどしたが、このクリンガー評伝を含めて、戯曲や小説など約 15 点の作品と著作を残した文筆のひとつでもあった。では発刊から今日に至るまで彼のこの書が、なお規範の書としての価値と権威を保ち続ける所以のものは何であろうか。それは先ず、彼リーガーがクリンガーとは血縁関係にあったこと、即ち彼の母 Johanna は、クリンガーが最も愛した妹 Agnes<sup>1</sup> の次女であったと云う事実である。少年マックスには、母から語り聞かされる一族の中のひとりの偉大な人物への畏敬が芽生え、また長じてはその資性と作品に、次第に高まる関心を抱いていたことは容易に推察される。確かに、アグネスからヨハンナ、そしてマックスに語り継がれるクリンガーやその周辺の人達に関わる事実、彼等にとっては大切な „Familienüberlieferung“ であり、一族の貴重な „Familientradiation“ であって、リーガーはその継

承者であったのである。

既にこの事実、リーガーのクリンガー伝成立の素地が認められるのであるが、1856年以降多くの著作を発表したリーガーに、さらに自らのクリンガー伝を世に問う決意を促したものがある。それは彼が序文に明言しているように、世上の誤ったクリンガー観修正への意欲<sup>2</sup>であった。たしかに、クリンガーの生涯にわたる正確で詳細な著述も乏しく、断片的で、しかも偏ったクリンガー観を伝える記述も少くなかったであろう当時において、誤謬を改め、正しいクリンガー像を提示すべく、血縁者のみがもつ愛情と、彼のみが所有する豊富な語り伝えと云う最も効果的な直接資料、さらに多くの証言や書簡の援用に基づくリーガーの叙述は、独自の迫真性を備えてクリンガーを再現したのであった。またこの書が与える対象の実在感、冷静な学術的所産の伝記などの到底及ばぬところ、とも付言しよう。

さらに本稿では、この書を特色づけるもうひとつの要素に就ても、特に述べておかなければならないのであるが、それは書簡である。リーガーの公刊の意図に就てはさきに記したが、同じくその序文には、執筆の直接の誘因となった事実にも言及されている。それによれば、リーガーが居住するアルスバハに保存される友人 Ernst Schleiermacher 宛の多数のクリンガーの書簡の利用を許されたこと、それによって彼は点数に於て、ロシアへ移住の1780年以前のクリンガー書簡のすべての蒐集者を凌ぐ結果となり、さらに、自らのクリンガー伝出版を断念した Prof. Weinhold が、彼に資料の一切を提供してくれたこと、などであった。伝記作製に際して最も重要な書簡の入手とその自由な利用が、執筆の直接の誘因となったのであれば、そこにも既にこの書の特質を窺わせるものがありはしないだろうか。一般に伝記の執筆に際しては、伝記的事実を識り、或いはその証左としての書簡の入手或いは蒐集は当然第一の必要事である。しかしリーガーのこの書にとってのクリンガー書簡とは、記述の内容に確証を与える資

料であることは勿論であるが、さらに一步進んで云うならば、リーガーにとってのクリンガー書簡とは、彼がながく伝承してここに到った語り伝えと同質同価値の意義をもって、内容を構成する根源的な資財であったと理解したい。

標題の下に添えられた „Mit vielen Briefen“ の意義を斯様に理解して、次にその内容であるが、リーガーが1774年夏と推定する、ギーセンからの友人 Phil. Chr. Kayser 宛の書簡から、ロシア移住を数日後に控えた1780年8月30日付の知人 J. Sarasin 宛の短い礼状まで、この Klinger in der Sturm- und Drangperiode に一致して、ドイツ時代のクリンガーの書簡総計57点が収録され、Briefe Klingers と纏めて本文に接続され一体となっている。

但し、これに続くクリンガーのロシア時代を語る Klinger in seiner Reife. Dargestellt von M. Rieger. (1896) では、扉に Mit einem Briefbuch と添記されて、1781年11月28日付 さきの友人 カイザー宛の書簡から、1830年12月12日付 Gräfin, C v. Egloffstein 宛のものまで、付録も含めて総計 291 点のロシア時代の書簡がこの Briefbuch に収められており、Klinger in seiner Reife に併せて、それに続く 1 巻としての形をとっている。ところで、リーガーの評伝におけるクリンガー書簡の意義を前述のように理解したが、この書はそれぞれ時期を同じくする書簡を伴ったことによって、クリンガーの実態はより明確に提示され、記述はより多くの実証性と説得力を付与され、それによってリーガーの意図した正しいクリンガー像はより適確に伝えられ、この評伝の特色をより際立たせると云う効果を齎したことは明らかである。

また仮に書簡のみに限ってみても、現在公刊されているクリンガー書簡集は、この Briefe Klingers と Briefbuch の他に経眼はなく、いずれ新たな、より充実した書簡集が発刊されるまでは、やはり唯一貴重な存在である。このように、書簡の集録この一事にしても、今日のクリンガー研究

は、リーガーに負うところ実に多大であると云わなければならない。いずれにしても、直接資料の乏しいシュトゥルム・ウント・ドラング研究の中にあって、クリンガーに関わる不朽の記録としての、リーガーのこの Klingerbuch の価値は極めて高く、事実に基づく規範の書としてながく研究を裨益するものと思われる。

### **Klingers Handschriften in Frankfurt**

リーガーの収録以外になお、ドイツを始めヨーロッパ各地の図書館や古文書資料室などには、彼が入手し得なかった、或いは全く経眼しなかったであろうクリンガーの書簡や手稿の類が、まだかなりの数で散在することもまた事実である。クリンガーに関する1次資料の調査と、入手の困難な2次文献の蒐集を主な目的として、私は1985年4月から3ヵ月 BRD に滞在した。資料調査に限って云えば、ズィーゲンの Prof. H. Kreuzer の勧めと紹介によって、ヴォルフエンビュッテルの Forschungsbibliothek („Zeughaus“) と、フランクフルトの Freies Deutsches Hochstift を訪れた。先ず Zeughaus では、Handschriften-Katalog から、ドルパト大学の監督官としてのクリンガーが、運営などに関して頻繁に意見を交換していた、古代言語学の教授 Karl Morgenstern 宛の書簡2点を閲読し、後日そのコピーを郵送されて入手した。リーガーの Briefbuch には、このモルゲンシュテルン宛の書簡は、1803年2月から1821年4月に到る65通が収められているが、日付のないこの2点は見当らない。

一方フランクフルトの Großer Hirschgraben に在る Freies Deutsches Hochstift は、一体となって隣接する Goethe-Haus と Goethe-Museum の管理にも当たっているが、120余年の歴史を有する学術研究機関としてのこの Hochstift の事業の最たるものは、人も知るように、18世紀以降のドイツ文学に関わる資料の蒐集である。その内容は文献もさることながら、

やはり膨大な数に及ぶ手稿であり、人名順に、A. 作品原稿、B. 書簡、C. その他、と分類整理された手稿の収蔵室は、さながら Germanistik の現代のひとつの宝庫と云えるであろう。因みにその主な内容の二、三を挙げれば、この Hochstift 発足当時鋭意蒐集されたゲーテ及び同時代人達の手稿、次にロマン派の、特にノヴァーリスやブレンターノなどのそれ、さらに第2次大戦後に入手のホーフマンスタールの遺稿など。特にホーフマンスタールは数量と完全性とに於て他を圧していると云う。ではクリンガーの手稿であるが、参考までに、Hochstift が1982年に発行の *Katalog der Handschriften* のクリンガーの項をここに転記してみよう。但し、ロシア時代のクリンガー書簡の中、最も多く現存するケーニヒスベルクの出版者の兄弟である G. H. L. Nicolovius 宛のものは、ここでも最多数の52点を数えるが、当面直接の必要はないので略記した。

- A. „Vorrede zu den philosophischen Romanen“; (1798), 9 S.
- B. *Boie, Heinrich Christian* 1776: 30. I.  
*Hartknoch, Johann Friedrich jr.* 1799: IV.; 1802: 9. VII.; 1805: 20. VI. -X.; 1806: 22. I.  
*Heinse, Wilhelm* 1777: 2 Br.; 1778: (Ende) I.  
*Kayser, Philipp Christoph* 1773: 23. VIII.; 1774: 1 Br.; 1791: 24. III.; 1792: 27. I. - 19. X.  
(*Kayser, Philipp Christoph*) 1775: (11. VII.)  
*Kotzebue, August von* 1802: 16. XI.; 1810: 19. IV.  
*Krause o. J.*: 1 Br.  
*Nicolovius, Georg Heinrich Ludwig* 1796/97: 1 Br. — 1821: 15. III.  
*Oldenburg, Erbherzog August von o. J.*: 1 Br.  
*Recke, Elisabeth von der* 1825: 4. I.

*Tarnow, Fanny* 1822: 9. VII.

*Unbekannt* 1803: 8. IV.; 1810: 25. VI.; o. J.: 1 Br.

C. Stammbuchblatt; III. 1775, 1 Z.

Prospektentw. zur Ankündigung seiner Werke; o. J., 4 S.  
2 Notizen (Abschr.); o. J., 1 S.

以上のように原稿1点、手稿その他が2点、また書簡は77点を数えることができ、ゲーテの同時代人のひとりであるクリンガーの蒐集も、例えばマラー・ミュラーの作品原稿のそれとは数に於てはるかに及ばないが、やはりなお努力の貴重な賜である。

ここでの、手稿部門の責任者である Behrens 氏の配慮による、約1週間全く自由に一室を占有しての、クリンガーの手稿の閲読は仲々困難な作業ではあったが、しかし、さきのヴォルフエンビュッテルに続き、またはるかに多くの、そして様々な内容をもつ手稿との出会いは、筆蹟の主に接するような感動と喜びを経験させてくれ、そしてまたおよそ4半世紀も以前のヴァイマルでの、ゲーテの原稿を手にした折の感激を思い出した。

斯様にして閲覧した手稿の中からは、前記のリストの Vorrede と、Prospektentwurf の2点のコピーを持ち帰った。後者は始めに挙げた1816年完結の12巻本 *Gesammelte Werke* に採択予定の作品目録であり、クリンガーは *Verzeichniß der Stücke dieser Werke* と記して、第1巻 *Die Zwillinge. Trauerspiel. 1774.* 他5編から、第12巻に *Betrachtungen und Gedanken über verschiedene Gegenstände der Welt und Literatur. 1804.* と、各巻採択の作品をそれぞれ成立の年代を添えて予定している。

次に、閲読した書簡からは5点を選んで持ち帰ったのであるが、ここに印刷にして公表したい書簡とは、さきのリストの *Kayser, Phil. Chr.* 1773: 23. VIII 即ち、1773年8月23日と明確な日付を有する、フランクフルトの



親友 Philipp Christoph Kayser に寄せられた最初の書簡なのである。  
この書簡を特にここで採り上げた理由、換言すれば、この書簡の有する意義に就て先ず始めに述べておく必要があるであろう。それは、

先ず、これがいまだ印刷に付されていない、未公表の書簡であること。  
次に、クリンガーのフランクフルト時代の古い日付をもつ、稀少価値の極めて高い、最初期の書簡のひとつであること。

さらに、その内容が、手稿の類でさえも現存するものが全く乏しいあの時期に於て、書信の形で残された、友情を求めての赤裸々な心情告白の書であること。

以上の三点であるが、特に始めの二点に就て若干敷衍するならば、先ずさきの M. Riegers Klingerbuch の項で既に記した書簡集、ドイツ時代のクリンガーを語る Klinger in der Sturm- u. Drangperiode に伴われる Briefe Klingers には、残念ながらこの一通は収められていないのである。この書簡集の収録の内容を明らかにするために、リーガーの Verzeichnis der Briefe から、57点の書簡の始めの数点を引き出せば、I. An Kayser (Gießen im Sommer 1774) II. An Schumann (Gießen im Herbst 1774) III. An Schumann (Frankfurt um Neujar 1775) IV. An Schumann (Gießen) Februar 1775 V. An Kayser Gießen 28. Juli 1775 VI. An Deinet für die Frankf. gel. Anz. August 1775 VII. An Boie (Gießen) 5. Dec. 1775. このように、1774年の書簡が2点、75年は5点と、収められた初期の書簡はまことに僅少である。因みに、クリンガーの大学入学のためのフランクフルトからギーセンへの移住は1774年4月であり、また Daniel Schumann は竹馬の友である。およそ活動も居住の地域に限定され、遠隔の地に友人縁者の類も皆無に近かったであろうクリンガーの、フランクフルトの最後の何年かを思えば、収集洩れを考慮しても、書簡の絶対数そのものが、極めて少なかったことは確

かであろう。なお一言付記すれば、点数こそ少ないが、これらギーセンから親友に向けての筆致は、溢れる若者の活気と、専攻の法律学はさて置いてひたすら創作に熱中する情熱を窺わせ、また作品成立の時期なども示唆して、劇作家クリンガーの最初期を識るひとつの手掛りとしても極めて重要である。

### **Klinger und Goethes literarischer Kreis in Frankfurt**

リーガーの評伝とそれに倣う Smoljan や Hering など、およそ80年に及ぶクリンガーの生涯を、1780年の移住を境として、ドイツ時代とロシア時代に区分しており、ここでも既に幾度かそれに従ってきたが、ペーテルスブルクに定住のロシア時代とは異なり、変動に富む青年期のドイツ時代のクリンガーはその生の足跡を辿って、次の3期に区分するのが最も妥当と考えられる。即ち、I. Klinger in Frankfurt. (Feb. 1752—April 1774). II. Klinger in Gießen. (April 1774 — Juni 1776). III. Klinger auf der Wanderung. (Juni 1776 — Aug. 1780). 主題と関連して本稿の対象は、この第1期、フランクフルト時代のクリンガーであることは云うまでもないが、問題とするクリンガー書簡を述べるその前に、先ずこの時期最後の数年のクリンガーとその環境を識る必要から、さらにいくつかの事実现就て述べておかねばならない。

フランクフルト時代のクリンガー、特にその幼年期からギムナジウム時代は、たとえ略述されても、殆んど常套的に用いられる表現が、生活の窮乏、そして貧困との戦いである。確かに、一家の生計の担い手の死後、残された寡婦と3人の子供達には、日々の糧を得るための苦しい戦いが課せられたのは事実である。それは1776年夏、ゲーテを訪ねてひと足早くヴァイマル滞在を果たしたレンツ宛の書簡に、クリンガー自身が語っているので、ここに引用してみよう。Hier haben Sie meine Geschichte. Soviel

ich von meinem Vater weiß, war er ein wunderbarer feuriger Mann, der nicht an seinem Platz war. Dabey von edlem Sinn. ... Ich verlor ihn in meinem achten Jahr da er an einem Fall starb, das so zu gieng. Nach seinem Tode wird meine Mutter krank auf 18 Wochen für Kummer. Wir Kinder all, und fremde Leute nahmen das bisgen weg das noch übrig war. Meine Mutter von der Liebe zu uns gestärkt ermunterte sich. Arbeitet mit ihren Händen, ernährt drey unmündige Kinder, ohne zu vermeiden, nicht in Schulden zu kommen. Als ich heranwuchs bat und flehte ich mich in die Lateinische Schule zu halten. Das geschah, sie konnte mir nichts abschlagen. Noch erinnere mich daß sie mein erstes Schulgeld nicht bezahlen konnte und es borgen mußte. Das gieng so fort. Sie erhielt mich bis ins 19 Jahr in allem, denn was ich mit Informiren und vom Chor bekam war sehr gering. Zwey Jahr erhielt ich mich und gab ihr was ich konnte.<sup>3</sup>...

1760年2月の父 Johannes の急死後、洗濯女として子供達を養った母 Cornelia の苦勞、最初のラテン語学校の学費も払えぬ貧困の生活、ギムナジウムの学資のための、下級生の指導や合唱隊のメンバーとしての僅かな収入の確保等々。ヴァイマルで会うレンツに、予め自己の経歴を紹介するこの簡潔で淡々とした筆致は却って感動的である。

以下の記述で対象とする クリンガー の フランクフルト の最後の数年とは、当該の書簡の日付に示される1773年8月を中心にして、およそその前後、具体的にはクリンガーのギムナジウム卒業から、大学入学のためのギーセンへの移住までの時期に限られる。リーガーに依れば、クリンガーのギムナジウム卒業は1772年9月であり、同月24日の所謂 Progression の式典には、校長 Purmann の式次第によって、クリンガーも第1学級の代表として、学友 J.G. Authäus と共に来賓に謝辞を述べた記録が残され

ている。このような、ささやかな事実の伝承にも、さすが具体的実証的資料に豊かなリーガーの本領が窺われるのであるが、そのリーガーも、ギムナジウム卒業からギーゼンの法学専攻の学生として、学長 J. W. Baumer の下での登録手続きのなされた1774年4月16日までの、約1年6カ月の空白を埋める資料を持ち合わせなかったようである。リーガーは、Was er in den zwischenliegenden anderthalb Jaren getrieben, darüber verlautet nichts. Aber was wird es anders gewesen sein als durch Unterricht Geld verdienen! Er hatte auf dem Gymnasium schwerlich so viel ersparen können als man für nötig hielt um das Universitätsstudium zu beginnen<sup>4</sup>... と述べて、来るべき勉学に必要な学資の貯えのための、準備の期間と見做している。勿論リーガーの言う通りであって、さきのレンツ宛の書簡の次の件りで告白しているように、この時期学資として100フローリンの貯えがクリンガーには必要であったのである。だが、この時期はそれのみでは終わらない。故郷フランクフルトで過ごす最後となった1年6カ月という歳月は、クリンガーにとって、単なる経済的な目的のためのみに費されたのではなく、彼の生涯を決定したといっても過言ではない、極めて意義深い経験を彼に齎したのであった。それは同郷の偉大な先輩ゲーテとのより緊密な交際であり、また彼を中心を集まる、時代の新しい文芸を志向する青年達との自由で活発な接触であった。さきのレンツ宛の書簡の引用の件りにすぐ接続して、Ich ward mit Goethe bekannt. Das war die erste frohe Stunde meiner Jugend. Er bot mir seine Hülfe an<sup>5</sup>... と語っているが、「青年期の最初の幸せなとき」とはこの時期のクリンガーの字義通りの、心情の総括的な表現と見做すべきものであろう。

この時期のクリンガーを、ゲーテは後年『詩と真実』の中に定着させているが、この二人のフランクフルト人、一方は Großer Hirschgraben に住む富裕な上層市民、そして Hofrat の息子であり、既にライブツィヒ、

シュトラースブルクの大学生活での豊かな経験から、天賦の素養を磨き、前途に光明を見て、文芸の世界に逞しい飛翔を目前にする青年であり、他方は Rittergasse の貧しい寡婦の息子であり、ギムナジウムを了えたばかりの、未だ薄明の底に佇む 2 歳半年少の若者である。この両者の最初の出会いを、リーガーは 1814 年 5 月のゲーテ宛のクリンガーの書簡から、ゲーテのライプツィヒからフランクフルト帰着の 1768 年 9 月から、シュトラースブルクへの旅立ちの 70 年 3 月の間、と早い時期を推測している。またゲーテは 1771 年 8 月 14 日、シュトラースブルクからフランクフルトの生家に戻り、ヴェッツラー滞留の 4 カ月を除いて、以後 1775 年 10 月 30 日のヴァイマルへの出発までの約 3 年 8 カ月をフランクフルトで過ごしている。二人の出会いの時期を確定するものは何も残ってはいないが、どの時期にせよ、二人の面識から厚い友情に結ばれた緊密な関係が生まれるまでには、左程の時間を必要とはしなかったであろう。

さらにまた、この密接な関係を恒常的なものにする、ひとつの会合の場がフランクフルトに存在した。即ちそれは、さきにも触れたゲーテを中心とする、文芸愛好の青年達の半ば自然発生的なサークルである。ゲーテはこれを『詩と真実』の中でも、小さな Kreis, Gesellschaft 或いは, Societät と様々に呼んでいるが、一種同好会的な青年達の集まりは、当時のドイツ各地に存在したようである。このフランクフルトの、ゲーテがそこに共に生き、自らの詩作の反響をその中に見出した、親しい仲間達との Kreis の実態は、『詩と真実』の次の記述からもその一面が窺われる。Wie sehr dieser Kreis mich belebte und förderte, wäre nicht auszusprechen. Man hörte gern die Vorlesung meiner gefertigten oder angefangenen Arbeiten, man munterte mich auf, wenn ich offen und umständlich erzählte, was ich eben vorhatte, und schalt mich, wenn ich bei jedem neuen Anlaß das Früherbegonnene zurücksetzte. „Faust“ war schon vorgeruckt, „Götz von Berli-

chingen“ baute sich nach und nach in meinem Geiste zusammen<sup>6</sup>...

ゲーテはまたこの記述に先だって、親しいフランクフルトの青年達、Joh. A. Horn, Joh. J. Riese さらに Hieronymus と Georg の Schlosser 兄弟、さらにあのダルムシュタットの Joh. H. Merck の名を挙げて回想し、続いて、Andere traten nach und nach zu diesem Kreis, deren ich künftig gedenke. と記している。これもまた時期を特定できないが、クリンガーがこの Kreis に加わったのは、これらの青年達よりかなりあとと推測する。また、シュトラースブルク時代の絆から、レンツも云わば地域外の仲間となり、同じく彼の地でゲーテを識り、1774年フランクフルトに戻ったヴァーグナーも以後この一員と見做される。さらに、ゲーテが尊重するチューリヒのラーヴァーターも、マンハイム在住のマラー・ミュラーも同じくこの Kreis に通ずる人達である。

参加の時期に若干の前後はあるが、多彩な活動で文学史を飾ったこの Kreis の青年達の云わば顔触れ、そしてさきの引用にみられるように、その中心人物が、„Götz“ 創作のさ中に在ったことを思えば、この Kreis の存在が、シュトゥルム・ウント・ドラングの文学運動の端緒に直結させられるのは当然であろう。このことに就て、いま少しゲーテの回想を引用しよう。Meine Lust am Hervorbringen war grenzenlos ... Auch nahmen viele gern an meinen größern und kleinern Arbeiten teil ... und aus diesem Quirlen und Schaffen, aus diesem Leben und Lebenlassen, aus diesem Nehmen und Geben ... von so viel Jünglingen ... entsprang jene berühmte, berufene und verrufene Literarepoche, in welcher eine Masse junger genialer Männer, mit aller Mutigkeit und aller Anmaßung, wie sie nur einer solchen Jahreszeit eigen sein mag, hervorbrachen<sup>7</sup> ... 大まかな抜粋ではあるが、とにかくこのように、自らの Kreis が文学史上に一時期を画するあの嵐の発生地となったことを、ゲーテ自身も認めているのである。

『詩と真実』から、この Kreis に関わる、さらにひとつのエピソードをここに加えておこう。1773年1月発刊のヴィーラントの „Teutscher Merkur“ に掲載の、いくつかの所謂 Merkurbriefe と、彼の歌劇 „Alceste“ (1773) に対する見解の相違から、彼ヴィーラントに一矢を酬いたゲーテの即興的な Farce „Götter, Helden und Wieland“ も、この Kreis の会合の中で一気に書き上げられて誕生し、その場の仲間の 歓呼に迎えられた、とその情景が語られている。<sup>8</sup> この Farce が書かれたのは1773年の秋の1日——ゲーテの記述では日曜の午後とある——であり、クリンガーはこの頃既にこの Kreis では、全く熱心でまた自身創作の才を備えた有能な Mitgenosse であったことは確かである。またそれのみでなく、さらに興味深い事実をリーガーは教えてくれる。即ち、リーガーは自らの有する語り伝えに、なお他からの証言を加えて、定期的に催されたあの会合の場所が Rittergasse のクリンガー宅であり、『詩と真実』に語られるあのゲーテの Farce の朗読も、実はクリンガーの部屋に於てであったと云う。

Der Ort, wo jene Farce geschrieben, vorgelesen und bejubelt ward, war, wie meine Mutter hatte erzählen hören, Klingers Stube. „Das arme Zimmer im Rittergäßchen“, so berichtet Creizenach (im Frkf, Mus. 1856) auf Grund der Frankfurter Ueberlieferung, „vereinigte damals jeden Sonnabend“——Goethe gibt aber den Sonntag Nachmittag an——„die ersten Namen der neuen Schule zu Besprechungen, in welchen eine leidenschaftliche Offenheit vorherrschte. Noch lange, nachdem die rasche Woge der 70er Jahre verrauscht war, sah man an der niedrigen Lehmwand der armen Frau Klinger die Silhouetten von Lavater, Maler Müller, Heinse, Füßli u. A.“<sup>9</sup> この Kreis の会合から生れた作品として残るのは、„Götter, Helden und Wieland“ これのみであるが、集まる同人達の様々な意見、それに対する各人各様の自由な反応、時には激論も闘わしたであろう

青年達の熱気に溢れるクリンガーの粗末な部屋、すべてが去ったあとの母の部屋のシルエット..... Rittergasse のその位置をいま 確認できないのは残念である。

クリンガーにとって、生涯を通じてのながく 活発な創作活動への 最初の導き手としての、この Kreis への参加はまことに意義深いものがあつた。ここに至って、クリンガーとゲーテの関係は単なる個人的友情の域を超え、文学的思索と詩作の自由で卒直な交流の中にあつて、前者が後者に負うところ多大なものがあつたことは、その処女作が „Götz“ (1773) に倣つた騎士劇 „Otto“ (1774) であつた事実を挙げるまでもなく明らかであるが、この両者が時代の一時期新しい文芸思潮の中に共存し、その関係がともに活躍する優れた先達と遅しい追随者のそれへと変容し、文学史を劃するあの時期が、前者の作品の題名を冠して呼称されるに至つたことを思えば、1772年から74年にいたる、シュトゥルム・ウント・ドラング人クリンガーの育成の場としても、フランクフルトのこの Kreis の活動は、文学史に残る意義深い役割を果たしたものと云わなくてはならない。

### **Klingers Brief an Kayser**

クリンガーのゲーテの Kreis への参加は、彼にまた別な恩恵を齎すことになる。云うまでもなくそれは交友関係の拡大であり、新しい友の獲得である。少年期からギムナジウム時代の、云わば地域的な交友の範囲を超えて、Kreis を通じてクリンガーは直接間接に新しい、文芸愛好の仲間として、多くの友人を得ることになる。それはリーゼであり、シュロッサーであり、またマーラー・ミュラーやヴァーグナーであり、さらにレンツであり、そしてこの 1773 年の夏に識つた フランクフルトの 若者カイザーである。彼 Philipp Christoph Kayser (1755—1823) は Katharinenkirche のオルガン奏者の息子として生まれ、作曲家として生涯音楽を天職とした



人物である。リーガーはこのカイザーに関して、音楽の素養のみでなく、文芸とくに抒情詩を好む内面志向的な性格を指摘して, *Zugleich ergieng er sich in lyrischen Gedichten und in einem sich selbst beschauenden Gemütsleben nach dem Geniestil, und er stand Goethe nahe genug, daß sich nach der frühen örtlichen Trennung eine dauernde Beziehung zwischen beiden erhalten konnte.*<sup>10</sup> と述べている。またゲーテとも近い距離にあったことは、或る事情のために1775年の始めカイザーがフランクフルトを去るに至ったとき、ゲーテは彼のためにラーヴァーターの住むチューリヒを指示して、カイザーの一身を彼に託したなどの経緯がそれを示しているが、カイザーもまたKreisを通して文通で親しんだレンツをその途次シュトラースブルクに訪れるなど、ここにもまたKreisを母胎にしての、連鎖的な交友関係の発展のひとつをみるが、このあたりの人間関係には全体としてまことに緊密なものがあったのである。チューリヒ移住後のカイザーも、ヴァイマルやまたそののちローマに於てなど、ゲーテとの接触も再三にわたるが、ゲーテはカイザーの内面的な性情を愛する一方、自作の歌劇の作曲を委託するなど、彼の有する音楽の才能を高く評価していたという。

ところが、クリンガーには音楽への志向やまたその作品にも音楽的要素は極めて稀薄であったことは否めない。クリンガーの場合、ゲーテのKreisが初対面の場となったであろうが、カイザーの天性に備わる魅力、*Kayser muß ein Mensch von gewinnender Liebenswürdigkeit ... gewesen sein...*<sup>11</sup> とリーガーの推測する、おのずから人の好意をあつめる好しさ、それがまずクリンガーの心を捉えたことであろう。リーガーはさらに言葉を継いで、*(Kayser muß) aber auch, wie das bei begabten Musikern leicht eintrifft, eine schwierige und absonderliche, eine melancholische und selbstquälerische Natur gewesen sein ...* とカイザーの内面を分析しているのである。序でながら、これら4個の形容詞

は、シュトゥルム・ウント・ドラングの戯曲、特にクリンガー劇の登場人物の性向にそのまま冠することができるのも、大変興味のある所である。さて、接触して忽ちにその美質を感得したクリンガーは、カイザーに友情を求める書簡を送る。この性急かつ積極的な行為は、また同時に、行動の原理として感情の優位を何よりも尊重するシュトゥルム・ウント・ドラング人の資質の表れそのものでもあろう。それでは主題の書簡であるが、これがカイザー宛の最初の書簡であることから、抑制を示してはいるが、それでもなお、求めるものをひたすらに獲得しようとする青年クリンガーの情熱を、やはりその筆致は生々しく伝えている。

書簡の体裁は、他のクリンガーの書簡より使用の用箋が 20.7cm×33.9cm とやや小さく、この1枚を半折にして表裏を使い、2面半にわたって小字で細密に書き誌されている。折り目をみると、それをさらに半折にし、左右両端を折り畳んで差し出されたものであろう。保存状態は良好の部類と云えよう。

次に掲載の写真版はおよそ80%の縮小であって、やや読み難いので、各面を一切そのままに活字に移してあとに添えた。その際語形や綴りその他、訂正の必要のある箇所も原文通りとした。例を挙げれば、第2面5行目の lachen は lachend であろうし、次の engegen は entgegen, また22行目の Sie は正しくは sie であるが、その他すべて手稿のままである。

なお、手稿所有の Freies Deutsches Hochstift の規定により、掲載の書簡の転写転載は禁じられる。

[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

一読して先ずこの書簡は、特にその文面の一部からして、クリンガーの最初期の戯曲と殆んど同趣の、直截的で調子の高い感情の表白であるとの印象を強くする。

カイザーには1773年の夏のこの頃、既に幾度か接触していたことが窺えるが、もし心優しい<sup>12</sup> 友と見做されていなければ、それは自分の態度容貌の所為である、などと諧謔めかしているのも面白いが、これはやはり、周囲に与える自身の印象に、ややもすれば強烈にすぎる一面もあることを自覚していたのであろう。但しクリンガーは、あの Klingsers Äußeres... に始まる『詩と真実』の記述にあるように、<sup>13</sup> 端正な容姿と毅然とした風貌の持主であった。それはさておき、ゲーテは外容に続いてクリンガーの資性に触れて、*reine Gemütlichkeit, ein unverkennbar entschiedener Charakter, ernstes Wesen, stolze Unabhängigkeit* さらに *Festigkeit* と *Beharrlichkeit* 等々の美質を挙げてクリンガーの内面を示してくれる。たしかに、『詩と真実』第14巻(1813)に描かれるのは、丁度40年を遡るクリンガーの画像であり、そこには若き日の友に贈る美化された記念碑的色彩の混入を全く否定はしないが、しかし、これらはすでに青年クリ

ンガーの本質のまさに適確な把握であろう。

『詩と真実』の記述がゲーテによるクリンガーの内面の総体的な分析と把握であれば、それに対してこの書簡は、1773年現在のクリンガー自らの内面吐露の一端である。さて書簡の次の件りでは、Sie haben in mir Ihren Freund entdeckt? Ja, ja, das haben Sie. Aber den zärtlichen, den gefühlvollen, den herzlichen Freund, den haben Sie noch nicht gehört. Und das sollen Sie jetzt. と前置して、一面にはかなり自主的、積極的な姿勢を覗かせながら、カイザーへのひたすらな友情を訴えかける。O! Könnte mein Herz, das Ihnen entgegen eilt, die Empfindungen ausdrücken, die jetzt seine ganze Glückseligkeit ausmachen, dann sollten Sie auch in jedem Zug den edeldenkenden, den vernünftigen Freund kennen lernen. ことさらに付言の要もなく、ここではカイザーへの熱い想い、高邁で思慮に富む友としての自身を強調するクリンガーに、自らの真情とそれに対する自負とが窺われる。次いでまた、Und stolz auf dessen Vorzüge, die ich mit Ihnen gemein habe... wollte ich Ihnen sagen, daß einen Freund mit solchen Empfindungen lieben, eine Wonne ist... 共有する美点を誇りとして、斯様な想いを抱く友を愛することは無上の喜びのひとつとさえ断言して、自らの求めるものが当時一部に流行の、リーガーの言葉を借りれば、wohlfeil<sup>14</sup> 安価な友情などとは異なることを強調している。

クリンガーのギーセン大学入学の3カ月後、即ち1774年夏に完成の彼の戯曲の第1作 „Otto“ は、既に1年前のこの書簡とまさに同時期、その構想が徐々に進展していたと推定されているが、書簡の次の一連の表白、Kommt denn so ‚süße‘, entzückende Empfindungen! nehmt meine ganze Seele ein! Euer Gefühl, euer göttliches Gesicht nur allein ist vermögend, mich mit der ganzen Menschlichkeit wieder auszusöhnen... この書簡中最も高揚した気分、荘重なまでのこの調子は、シュトゥルム・

ウント・ドラング劇の1シーン、例えば天を仰ぎ高々と両の手を差しのべて希求する、劇中人物の科白を想起させるものではなかろうか。さらに次の件りは、その全体が、クリンガーが自身と相手に向かって高らかに歌いあげた友情の賛歌であって、直截的また一面的に過ぎるとの非難を否定はしないが、しかしなおさきの件りと併せて、シュトゥルム・ウント・ドラング運動を担った Genie 達の中で、やはりその精神を最も純粋に顕現したクリンガーの魂の発露、或いはその真骨頂を早くもここに見る思いがする。

次に、クリンガーがその死を痛惜する親友に関しては、リーガーの中にも該当する人物が見当らず、具体的には一切が不明であるのは残念である。しかし、当のカイザーに就ては既に記したように、リーガーも自らの語り伝えから知り得た事実、さらに集録したかなりの数のクリンガーのカイザー宛の書簡、加えてまた、1774年から77年の日付をもつ、クリンガーを通じて知ったギーセンのシュライヤマッハー宛のカイザー書簡<sup>15</sup>等から、当時のクリンガーの友人群像の中では、最もよくカイザーを認識していたものと考えられる。そのリーガーに依れば、要するに彼をクリンガーに結びつけたものは、彼のもつ繊細多感でかつまた情熱的な心と、現実の生とその諸々の狭隘な関係に反撓する彼の誇り高い精神であったという。確かに、ゲーテが挙げた幾つかの特質を想起するまでもなく、このカイザーの資質を幾倍かに増幅すれば、それがそのままクリンガーの資性と合致する。ゲーテを借りていま一度云うならば、それらはあの *reine Gemütlichkeit* であり、*stolze Unabhängigkeit* であり、そしてまた *ernstes Wesen* であろう。

クリンガー自身この共通性を意識して、カイザーの美質とその根源にあるもの、そしてそれに基づく一切の規範が自らのそれと一致することを、早くも看破して次のように語っている。Aber ich sah Sie, ich lernte Sie in 8 Tagen kennen. Ich wurde gewahr, daß die edelste Denkungsart, die Sie haben, keine bloß abgezogene und auswendig

gelernte Grundsätze sind; nein, ich sah, daß sie aus der Rechtschaffenheit des Herzens quollen, mit geheimer Freude fühlte ich sie mit den meinigen, (die auf eben diese Art entstanden) übereinstimmen, und ich mußte dich lieben, ich mußte dein bester Freund sein, ...重ねて云えば, 両者に共通する規範とその根源の一致, それがカイザーに友愛を求めた真の理由であることも, またここに於て明白となる. そしてその規範, 或いは生の原則の源泉たるものは, 心の誠実であると語っているのであるが, クリッガー自身に就て云うならば, 自らに内在するこの Rechtschaffenheit への信頼こそ, 彼のややもすれば困難な青年期の生を支える柱であり, 依って立つ基盤でもあったのではなかろうか. 彼の誇り高い独立不羈の精神の由来する所もまたそれではなくてはならないであろう. 在来の一部の誤ったクリッガー観は, 内奥にある核心を看過した所から出発しているように思われる.

書簡の以下の文言は, 節度を保ちながらも, さらに随所に断定的な響きをさえ感じさせて, 心の友を獲得しようとする青年の一途な姿勢を示している. いつの場合にも, 書簡は研究資料として極めて重要であることは云うまでもないが, 敢て重ねて云えば, 未知の部分も少なくない, いやそれどころかあの Kreis への参加以外に, クリッガー自身による生の事実を伝える記録にさえ乏しいあの1773年当時であって, このような局面に於てのクリッガーの内奥を伝えてくれるこの書簡の存在は, 彼の心の最初期の記録のひとつとして, クリッガー研究にとっては貴重そのものである.

クリッガーがこの書簡の末尾に懇請し, そしてそれに応えた筈のカイザーの返書は恐らく現存しないであろう. しかし, リーガー所収の1774年夏以降のカイザー宛のクリッガー書簡は, 二人の友情が急速に成長し, その後の両者がこの上ない緊密な関係によって結ばれていることを示している. またそれのみでなく, シュライヤアマッハー宛のカイザー書簡の随所には, クリッガーに対する情熱的な友情, いや切々たる想いが語られてい

るのである。

最後に、フランクフルトからチューリヒへの移住の前後と推測されるカイザーが、ギーセンのクリンガーに寄せた抒情詩を紹介しよう。この詩によっても、この友情がどのように結実したか、クリンガーの Liebe に応えたカイザーの Gegenliebe がどのような内実のものであったかが把握されよう。

An Klinger.

Um Mitternacht.

Dich denk' ich — Ha! mein Geist beginnt  
Hinan! Das Blut in Adern rinnt;  
Mein Herz klopft tausendfach in Schlägen  
Dem Bild, das meine Phantasie  
Sich jezzo malt, — und Himmel wie? —  
In Götter Wonn' entgegen.

Dich denk' ich — ha! da stehst du schon  
Vor mir — und lächelst stillen Hohn  
Dem Volk, das nur in seinen Leiden  
Die Ruthe fühlt, das nicht wie ich  
Und du, dem Schicksal willig sich  
Ergiebt — und fühlt doch Freuden.

Da stehst du! hold von Angesicht  
Blickst du mich an, und süße spricht  
Dein Mund die öftern Lehren wieder:

Sey stark und männlich! halt dich auf!

Sey ruhig! laß der Dinge Lauf!

Und beug dich nur nicht nieder!

— — — —

Ich folge; Ja! reich mir die Hand

Noch ferner hin! Ins Götterland

Selbst, solst du mich dir folgen sehen.

Du bist mein Vater, Lehrer, Freund,

Du bist mir alles! ganz vereint

Mit dir will ich nur gehen

Die Bahne durch, die dornenvoll

Zwar ist — doch endlich auch noch soll

Uns bald zur Rosenlaube führen.

Geh muthig vor! Ich seh das Ziel!

Ich seh den Kranz! — der Kränze viel! —

Thät mich auch einer zieren!!!

注

- 1 クリンガーには生後まもなく死亡した弟の他に、姉 Anna Katharina とこの妹 Agnes(1757-1815)があった。彼女はクリンガーを回想するゲーテのDichtung u. Wahrheit. III. Teil. 14. Buch (1813) にも「美しくて、けなげな妹」とあるが、利発で愛らしい性格から、Rittergasse の当時のクリンガーの宅に集まる友人達に人気があったと云う。フランクフルトを去って後年まで、クリンガーが氣遣ったのは母と、特にこの妹であった。
- 2 M. Rieger : Klinger in der Sturm- und Drangperiode. Vorwort IX. Man kann von Klinger, wenigstens von dem jungen, nicht sagen, daß sein Charakterbild in der Geschichte schwanke. Es gehört vielmehr zu denen, die fest ausgeprägt worden sind, one daß man vom Leben des Mannes



- etwas rechtes wuste und von seinen Schriften eingehend und zusammenhängend Kenntnis nam. Der Name Klinger bezeichnet in der herkömmlichen literargeschichtlichen Ansicht wenig mehr als einen conventionellen Popanz, und erst die neueren Studien über ihn haben begonnen dieser abschreckenden Figur menschliche Züge abzugewinnen.
- 3 Briefe von und an J. M. R. Lenz. Hrsg. v. K. Freye u. W. Stammler. Leipzig 1918 Bd. 1 S. 267 レンツの書簡集にみられる、ギーセンからのこの一通は、レンツがその一部を筆写して、Frau von Stein に送ったと言う経緯をもっている。
  - 4 M. Rieger, S. 9
  - 5 Briefe von u. an Lenz. Bd. 1 S. 268
  - 6 Dichtung und Wahrheit. III. Teil. 12. Buch. Hamburger Ausgabe Bd. 9 S. 507
  - 7 Dichtung u. Wahrheit. a. a. O. S. 519-520
  - 8 Dichtung u. Wahrheit. III. Teil. 15. Buch. H. A. Bd. 10 S. 58. Diese Beschwerden hatten wir kaum in unserer kleinen Societät leidenschaftlich durchgesprochen, als die gewöhnliche Wut, alles zu dramatisieren, mich eines Sonntags nachmittags anwandelte, und ich, bei einer Flasche guten Burgunders, das ganze Stück, wie es jetzt daliegt, in e i n e r Sitzung niederschrieb. Es war nicht so bald meinen gegenwärtigen Mitgenossen vorgelesen und von ihnen mit großem Jubel aufgenommen worden ...
  - 9 M. Rieger, S. 12-13
  - 10 M. Rieger, S. 14
  - 11 M. Rieger, S. 15
  - 12 この書簡では、クリンガーは前後4度もこの形容詞 zärtlich を Freund に冠していることが注目をひく。この語はグリムによれば18世紀後半 Empfindsamkeit 以降, empfindlich, zartfühlend, liebevoll などの意味で Liebe 或いは Freundschaft の表現に限って、好んで用いられたという。
  - 13 Dichtung u. Wahrheit. III. Teil. 14. Buch. H. A. Bd. 10 S. 12
  - 14 M. Rieger, S. 14.
  - 15 M. Rieger, Briefe Kaysers an Schleiermacher. Anhang zu Briefe Klingers.

#### 使 用 文 献

- Fr. M. Klingers dramatische Jugendwerke. In drei Bänden. Hrsg. v. H. Berendt u. K. Wolff. Erster Band. Leipzig 1912
- Klingers Werke in zwei Bänden. Auswahl v. H. J. Geerdts. Berlin u. Weimar.

3. Aufl. 1970
- Fr. M. Klinger. Werke. Historisch-kritische Gesamtausgabe. Band I. Hrsg. v.  
E. P. Harris. Tübingen 1987
- M. Rieger, Klinger in der Sturm- und Drangperiode. Mit vielen Briefen.  
Darmstadt. 1880
- M. Rieger. Briefbuch zu Klinger in seiner Reife. Darmstadt. 1896
- O. Smoljan, Fr. M. Klinger. Leben und Werke. Weimar. 1962
- Chr. Hering, Fr. M. Klinger. Der Weltmann als Dichter. Berlin. 1966
- Briefe von und an J. M. R. Lenz. Gesammelt u. herausgegeben v. K. Freye  
u. W. Stammer. Erster Band. Leipzig. 1918
- Goethes Werke in 14 Bänden. Hamburger Ausgabe. Band IV. 4. Aufl. 1960 ;  
Band IX. 3. Aufl. 1959 ; Band X. 1. Aufl. 1959
- Freies Deutsches Hochstift. Reihe der Schriften Bd. 25. Katalog der Hand-  
schriften. Bearbeitet v. J. Behrens u. A. Tübingen. 1982

# Ein ungedruckter Brief von Fr. M. Klinger

Mitsutomo Maruyama

M. Riegers „Klinger in der Sturm- und Drangperiode. Mit vielen Briefen.“ (1880) gilt heute noch als ein biographisch grundlegendes Klingerbuch. Der Grund dafür ist, daß der Autor der Großneffe des Dichters war. Rieger konnte alles, was er von den Familienüberlieferungen wußte, insbesondere was er von den Erzählungen seiner Mutter hörte, zur biographischen Arbeit benutzen. Auch seine Sammlung der Briefe Klingers gab ihm, wie er in dem Vorwort erklärt, den ersten Anlaß zur Veröffentlichung. Die Briefe spielten bei ihm also eine besonders wichtige Rolle. Sein Klingerbuch entstand sozusagen auf Grund der nur ihm eigenen Überlieferungen und der gesammelten Briefe. Das Buch Riegers „Mit vielen Briefen“ ist von so einem einzigartigen Charakter.

In der Handschriften-Sammlung des Freien Deutschen Hochstifts in Frankfurt befindet sich auch eine Menge der Briefe Klingers. Ich besuchte Juni 1985 die Handschriften-Abteilung des Hochstifts, sah die mir interessanten Briefe durch und ließ mir davon fünf kopieren.

Hier wird ein Brief mit dem Datum vom 23. Aug. 1773 erwähnt. Denn der Brief, den Riegers Hand nicht erreichte, ist nicht bloß als eine der frühesten Handschriften, sondern als auch die erste briefliche Herzensergießung des jungen Klinger, die sich jetzt findet, sehr wert- und bedeutungsvoll.

Goethes kleiner literarischer Kreis in den Jahren 1772 — 1774 in Frankfurt, wo die jungen genialen Männer an seinen Arbeiten teilnahmen, war die Wiege des Sturm und Drang. Klinger war ein lebhafter und produktiver Mitgenosse desselben. Er lernte da

im Sommer 1773 Phil. Chr. Kayser, einen Freund Goethes, kennen, fand in ihm sogleich einen Herzensfreund. Der oben erwähnte Brief Klingers ist der erste an Kayser. Der Brief ist dem Inhalt nach ein Antrag, die Bande der Freundschaft zu knüpfen, aber er drückt zugleich auch deutlich das feste und rein gemütvolle Innere des jungen, schaffenden Klinger in der frühesten Sturm- und Drangperiode aus.

Seine Äußerungen, zum Beispiel die folgenden, „Kommt denn so süße, entzückende Empfindungen! nehmt meine ganze Seele ein! Euer Gefühl, euer göttliches Gesicht nur allein ist vermögend, mich mit der ganzen Menschlichkeit wieder auszusöhnen...“, erinnern uns gleich auch an die Monologe in seinen früheren Dramen. Die Stimmung der Äußerungen ist ganz gleich wie die von seinen ersten dramatischen Hauptfiguren.

Der hier veröffentlichte Brief ist zur Zeit der einzige, schriftliche Beweis für sein Leben und Schaffen in seinen letzten andert-halb Jahren (September 1772—April 1774) in Frankfurt. In diesem Sinne ist und bleibt der Brief Klingers an seinen Jugendfreund auch ein sehr wertvolles und bedeutendes Forschungsmaterial.